

茅葺屋根の最後の職人（増林）

山本 泰秀

今では凡そ見られなくなった茅葺屋根は、昔から屋根材としては最も入手し易い茅で出来ていた。その歴史は、縄文時代に遡ると考えられている。それ以後の人類の営みの中心を支えてきた茅葺屋根は、継続的に屋根として使用されるようになり、ススキを専用に育てる場所が必要になってきた。これを茅場と呼び、この茅場確保により毎年一定の材料ができ、これを貯めておき、茅葺替えに用いた。

当増林地区の人々は、古利根川堤外・元荒川堤外に茅場を作ったり、また江戸川縁の大川戸・金杉近辺からも調達していた。戦後は、遠くは古河及び渡良瀬川上流から野州茅として調達するようになった。長さ二尺の縄をふた丸木として、一束一円八十銭で買いとり、トラックで増林迄運搬してもらった。

当増林地区の勝林寺は、寺院裏手の古利根川河川敷に茅場を有していた。又、明治十三年の勝林寺寺院明細帳によると、元荒川堤外（西川）原野の面積は茅の地一反一畝二十歩・秣場（牛馬の餌）地一畝九歩・葦きじ（※1）六反五畝十九歩とある。ともかく茅場の面積が広く、毎年多くの檀家の人々が刈り取り、庫裏の天井裏に格納しておき、使用年度に下して茅替えに使用した。ただ、昭和十二〜三年頃になると食糧増産の為、古利根川・元荒川堤外の茅場は、つぶされた。

茅葺替えの労苦は大変なものであった。しかし、職人の顔が登場することはなかった。大工や左官には名工とうたわれた人々が建築の生産史に現れても、茅葺きの名工と言つ者はない。それは、技の洗練度の違いというより民衆の側に蓄積された技術として、作者を持たない匿名性において成立していた工法であった。

増林の茅職人は古くは、鈴木新次郎氏がいた。この人は、代々続いた茅職人で、その弟子鈴木益次郎氏・須賀牧太郎氏、最後の弟子に小管留吉（昭和二年五月一日生）氏がいる。この小管氏にこの頃の茅葺替えについて聞いたことを書き留めておく。ちなみに屋根職が一人前になるには五年もかかることである。

昔の住居は大きく茂った屋敷林に囲まれた茅葺屋根であった。総切り型の寄棟の民家が点在していた。風景を思い起すに、屋敷林の樹木は、北側に常緑樹、母屋の上は落葉樹、正面はオーブンにして青空をバックに暖かであった。夏は涼しくしのぎ易く又、冬暖かであった。しかしながら、屋根吹き替えはとても大変なことだった。

勝林寺の本堂の屋根替えは、昭和二十五年三月に行われた。職人は、小管留吉氏・榎本助左衛門氏、大川戸の川鍋氏、備後の森泉氏、武里の中村氏、他二人位の人数とさらに働き手としての人夫が数十人で十四〜十五日程かかった。屋根に足を踏ん張るので、藁草履や足袋は三日で切れてしまった。束ね方五掴みを一把として使用した。寺等大きな建物は、十一〜三把使用。民家は、四〜五把でたくさんであった。尤も、茅だけだとずり落ちてしまうし、屋根の勾配を付ける為、ノベ（藁と麦わら）を使用した。耐用年数は、日当たりの良い建物の屋根は三十年、建物の真裏に杉の木や雨が落ち苔の生えている家の屋根では二十年ほど、草ぶき屋根の麦藁のみは十年〜十五年、麦藁と藁を半分、半分ずつの使用で十八年であった。ちなみに、葎は、水に浸し、掛け矢でたたいたり、藁括（※2）でつぶしたりし、一丸木三十本位を一束とした。葎を切って杉皮の上に並べて敷いた止縄にシュ口縄を使用した。割高なので神社等に使用された。耐用年数は十五年ほどであった。

勝林寺の屋根替えの時には、須賀角蔵爺さん、須賀久次郎氏が助っ人としてせつせと仕事の段取り良く手配などを勝林寺の為にしてくれた。二人とも温厚な人だった。しかしながら、昭和四十三年七月、本堂の小屋ごっかい(取り替え)により、茅葺屋根は取り壊されて、瓦屋根になった。

庫裏の屋根替えは、昭和二十七年四月に行われた。私も小学校四年生の時に手伝った記憶がある。茅を半分に切ったその茅の束を重ね、さらに長茅を葺き、これを竹で押さえつけながら小舞(※4)に結束する。大体、一・五尺から二尺間隔でこれを繰り返し、縫竹、あるいは縫い針という縄を通す事のできる大きな針状の竹で、屋根の上にいる者と下の者が声を掛け合いながらやり取りしつつ下地を縫い付けていく。

この針の上と下で縄を組み替える作業を私が行ったのである。この作業は天井裏で行うため、煤が沢山付着し体中真っ黒で、手には墨がこびり付く状態であった。昭和四十四年十一月庫裏は解体され、十二月に新築工事がはじまった。

一般の民家は、坪数の大きな家では、職人は四人位で一週間はかかって仕事をした。家主からは三食出て、体が真っ黒になってしまうので、お風呂に入れてもくれた。六月頃に麦藁が採れるので、盆前に仕上げて欲しいと言われることが多かったそうである。ともかく、この作業には大勢の人がかかわった。

縫い針作業の時は、屋根職人一人に一人、さらに、助手が二人位付いた。茅を押し切りで二つに切る人、屋根まで茅を運ぶ人等々、一つの屋根替えには、総勢二十〜三十人もの人夫という大勢の人達で構成されていた。家主が出す三食は、それぞれの家で作られた物であった。当時の農村の台所は、太古の時代の遺構の面影を残していた。床下の土間と床上の生活空間とが分離したオーブンシステムであった。火と水を取り扱う場所が他の生活場と分離されていたのは、生活防衛に他ならぬことであると思われる。土間の中央には炊飯用の大竈、煮物などのおかず類を作る竈の二つがあった。煙突の無い炊事場は焚火でいぶされ、火の粉が飛び交い、ほこりと煤で空気が汚れて、台所仕事をする主婦にとっては、戦場でさえあった。

昭和三十五年以後は、屋根替えの仕事が無くなって来た。小菅留吉氏の話にあるように家庭生活に大きな変化が表れてきた。増林での昭和三十六年七月に島根屋商店のプロパンの販売開始、続いて越谷農協が三十八年四月に、石川商店が三十八年十二月相次いでプロパンガスの販売を開始した。ガスの普及と同時期、昭和三十六年十二月四日に当地区各家庭に水道もひかれた。従来の台所のシステムを根本的に変えたプロパンと水道。従来と異なる利便性が家庭生活全般におよび、著しく住環境までも変えていった。当地区でも、いずれこの家も建て替え、新築されてきた。

近年、瓦屋根さえ、ガリバリウムと言うような軽く、長持ちする素材の屋根にとって代わりつつある。完全に茅葺屋根は消滅してしまったようだ。

※1. 葦だけが生えている所を指すと思われる。

※2. 藁を束ねて結束したものの。

※3. 糸がぬけない様に(ほぐれない様に……)作る小さなじぶ。

※4. 細い竹のこぶをわす。